

## 今日のノート

米国のある病院の救急室。ベトナム人の父親が発熱した息子を連れてきた。子どもの体に生々しいあざができており、父親は幼児虐待の疑いで逮捕された。そのあざは熱した硬貨を体に当てて悪いエネルギーを追いかける民間療法のためだったが、疑いをかけられた父親はその後、自殺した。

外国人患者が多い病院では異文化が衝突し、誤解と偏見が誤診や悲劇につながりかねない。米国のモザイク社会では、こうした行き違いはかき知られているはずなのに、米政府広報誌「トレンズ」今月号がベトナム人の父親の悲劇

をはじめ「文化の違いに戸惑う医療現場」を取り上げたのは、新たな移民の波が押し寄せ、さらに複雑な状況になったからだ。

例えば、日系市民やアフリカ系市民の相手をいたわる微笑は、白人医師には不可解な笑いと受けとられ、ヒステリーと誤診されるこ

## 異文化の衝突

在日外国人が百二十万人を超え医療の場の文化摩擦は、他人事ではなくなった。外国人用の医療ガイドが次々出版され、大阪でもアジア医師連絡協議会が外国人のために医療の電話相談窓口を十二月に設けるのは、国と自治体の対応が鈍いなかで評価している。

これまで言葉の壁と治療費のトラブルが問題になってきたが、文化・習慣の摩擦は決め手の「処方せん」がない難問だ。全部の文化を理解することなどとてもできない。こちらの

とがある。血液に魂がこもっていると信じるハイチなどの出身者に血液検査を勧めるのは容易ではない。カンボジア人は病院で死ぬことにこだわる。自宅で亡くなると魂があたりをさまよい続けると固く信じているためだ。

習慣がすべて正しくて倫理的だと思つ前に、文化の体質の違いを前提にして相手に耳を傾けることから始めるしかない。三木 健一